試みることが必要ではないだろうか。

紙数の関係から推計作業の細目に関する評者の批判を述べることは難しいが，2つだけ疑問点をあげておく。第I章における60品目の中に代表度が50%未満のものが3割近くあるが，代表度が高いという基準をどこに置かれたのか。また第II章では，自動二輪車の従業者数を除外しており，その除外方法は生産額の構成比によっている。しかしこの根拠がはっきりしない。それよりも自動二輪車を含めた生産額調整の方がより事態をはっきりさせるのではないか。

以上のようなコメントはあるにしても，それは著者の業績の価値に較べれば極小さなものである。対象産業，比較年次，比較対象国の拡大等，より一層の御研究の発展を期待すること切なるものがある。　〔野田　孜〕

---

重　田　澄　男

## 『マルクス経済学方法論』

有斐閣　1975.12　378ページ

---

よく知られているように，故宇野弘蔵氏は『経済原論』上下，『「資本論」と社会主義』，『経済学方法論』，『社会科学の根本問題』等々，多くの著書・論文をつうじて，経済学の研究分野を，①資本主義の一般的法則を解明する「原理論」，②資本主義の世界史的発展段階の規定をあたえる「段階論」，および③各国資本主義の具体的分析をおこなう「現状分析」という3つの段階に分けることを提唱された。そして，このいわゆる3段階論を基軸として宇野氏の方法論上の主張は，経済学と唯物史観，理論と実践，科学とイデオロギー，経済学と社会主義，自由と必然，などの問題領域にまで及んでおり，それはたんに経済学だけでなく，ひろく社会科学一般にわたる独自な理論体系をなしているといってよい。

ところで，こうした宇野理論(とくに「3段階論」)にたいして重田澄男氏は，「原理論の諸前提と純粋資本主義の想定——宇野理論の検討(その1)——」(『大阪経大論集』第51号，1966年5月)を皮切りに一連の批判論文を発表してこられたのであるが，それらを統一に付して出来上ったものが本書『マルクス経済学方法論』(有斐閣，1975年)である。いま，その章別構成を示しておけば次のとおりである。

序　章　「3段階論」の契機と特徴
第1章　原理論の諸前提と「純粋の資本主義社会」の想定
第2章　純粋化傾向の認識論的難点
第3章　いわゆる客観的抽象の恣意的性格
第4章　下向上向法と各国別特殊性の捨象
第5章　自立的運動体の完結性
第6章　「商品経済」論的資本主義把握の仮象性
第7章　資本主義発展の非帰一性と3段階論
第8章　資本主義の具体性と純粋化傾向
第9章　帝国主義段階における「純化・不純化の問題」

これらの諸章の見出しからも察せられるように，重田氏の宇野理論批判の論点は多方面にわたっているが，本書全体のねらいは——著者自身の言葉でいえば——「宇野理論の方法がよってたつ前提的な基礎的諸命題をとりだし，客観的な現実的事態にたいする認識における基礎命題としての当否をあきらかにするといったかたちで，解釈学的方法を意識的に排して，認識論的な視角からの検討をおこない，そこでの論理的なあいまいさや誤りをあきらかにすることによって，資本制的経済構造についての規定的内容と現実把握のための方法と論理はいかにあってはならないか，いかにあるべきか，を明らかにしよう」(「まえがき」2～3頁)というところにある。しかし，宇野理論にたいするこの「認識論的な視角からの検討」がどのようにおこなわれているかを本書の各章についてトレースしてゆくことは，紙幅の制約もあって，とうてい不可能なので，ここでは，著者の基本的主張を示すと考えられる若干の文章を引用しながら，それについて簡単に私見を述べることにしたいと思う。

ところで重田氏は，宇野「3段階論」の論理構造とその特徴を問題にされながら，つぎのように主張しておられる。——「宇野弘蔵氏の『3段階論』の全体的構造にとっての基本的特徴は，『資本論』のあやまった理解のうえにたった『原理論』の方法の純化なるものにもとづく『原理論』の内容と範囲の限定によって，資本主義的経済関係における一般的な『原理』的なものと，そして，帝国主義段階や一国資本主義といった現実的諸事態における具体的なものとしての多様性や変化をしめしている諸様相や諸形態との切りはなし，そして，切りはなされた一般的な原理と発展段階的あるいは各国的な具体的な諸様相や諸形態との『原理論』ならびに『段階論』『現状分析』へのふり分けというところにある。そして，そのような特徴をもった『3段階論』をうみだし規定する根拠となっている『原理論』の方法の純化なるものにとって決定的な役割をはたしているのは，歴史的発展における『純粋化傾向』なるものにもとづいて『原理論』的

ビルドとしての『純粋の資本主義社会』を想定するという方法であって，ここに，宇野理論全体の特異な連鎖をささえる『環』をみいだすことができるものである」(8頁)。

著者はまた，こうも述べておられる。「『3段階論』として展開されている宇野弘蔵氏の経済学の方法とその基本的内容は，19世紀中葉までのイギリスにおける『純粋化傾向』にもとづいて『原理論』的ビルドとしての『純粋の資本主義社会』を想定し，それにもとづいて資本主義の一般的原理をあきらかにするという，宇野氏に特有の『原理論』の方法によって根拠づけられているのであり，しかも『原理論』の方法にとっての客観的基礎とされている『純粋化傾向』なるもののなかに，その全内容の秘密と誤りの一切が，圧縮して組みこまれ，前提されているのである」(240頁)。

このように著者は，宇野「3段階論」を支えているのは「『原理論』の方法の純化」(『資本論』の「原理論」としての純化)の主張であり，そしてこの主張そのものは「歴史的発展における『純粋化傾向』なるものにもとづいて『原理論』的ビルドとしての『純粋の資本主義社会』を想定するという方法」(＝「客観的抽象の方法」)に基礎づけられているとされるのだが，このような指摘は当を得たものということができよう。また著者が，宇野氏の「客観的抽象の方法」を問題にしながら，もともと「国家や国際的関係については，非資本主義的『残滓』の捨象と同一の論理的手つづきによっては捨象することはできない」にもかかわらず，宇野氏の場合，「捨象にあたっての客観的根拠と思考操作の論理的運用における相違を無視して」「これらの諸要因を，純粋化傾向にもとづいて非資本主義的『残滓』とおなじ『不純物』として捨象する」(67頁)ことになっていると批判しておられるのも，当を得ているといえよう。

しかし重田氏が，宇野「3段階論」への批判の過程で，「『純粋の資本主義社会』なるビルドの想定が，はたして『資本論』におけるマルクスの基本的方法とみなしていいものであるかどうか」(13頁)とか，「マルクスは，資本主義の歴史的発展における純粋化傾向にもとづいて，その『極点』として『純粋の資本主義社会』を想定し，それによって『資本論』の基本的内容をうちたてることができたのかどうか」(18頁)と設問して，これに否定的に答えられるのはどうであろうか。この点で当然に問題となるのは，『資本論』第3巻におけるマルクスのつぎの文章である。――「理論では，資本主義的生産様式の諸法則が純粋に展開されるということが前提されるのである。現実にあるものは，いつでもただ近似だけである。しかし，この近似は，資本主義的生産様式が発展すればするほど，そして従前の経済状態の残滓による資本主義的生産様式の不純化や混和が除かれれば除かれるほど，ますます進んでくるのである」(『マルクス＝エンゲルス全集』㉕a，大月書店，221頁)。この文章について重田氏は，それは「けっして『資本制的生産様式の諸法則〔を〕純粋に展開』するにあたってのなんらかの『経済学の方法』について述べているものではなく」(23頁)云々といわれるのであるが，しかし，「従前の経済状態の残滓」を伴う現実の資本主義社会では「資本主義的生産様式の諸法則が純粋に展開される」ことはありえないのだから，マルクスが「理論では，資本主義的生産様式の諸法則が純粋に展開されるということが前提される」と説くとき，彼が，理論的研究にさいしては現実の資本主義社会から「従前の経済状態の残滓」を捨象して純粋資本主義社会を想定しなければならないとしていること，こうして彼が「経済学の方法」について語っていることは否定できないところであろう。しかもマルクスは，うえの引用文においてだけでなく，『資本論』その他の著作の随所でこのような指摘をおこなっているのであって，たとえば『剰余価値学説史』のなかには次のような叙述が見いだされる。――「資本主義的生産の本質的諸関係の考察にあたっては，商品世界全体，物質的生産――物質的富の生産――のすべての部面が，(形式的または実質的に)資本主義的生産様式に征服されている，と想定することができる。{なぜなら，こうしたことは，だいたい次第に起ってきていることであり，原理的な到達点であって，この場合にだけ労働の生産力は最高点にまで発展するからである。} このような前提は，極限を表わしており，したがってそれはますます厳密な正確さに近づいてゆくのであるが，この前提のもとでは商品の生産に従事するすべての労働者は賃労働者であり，生産手段はこれらのすべての部面において資本として労働者に対立している」(『全集』㉖I，521頁)。

ここでマルクスが，「資本主義的生産の本質的諸関係の考察」あるいは理論的研究にさいしては，資本主義的生産様式がすべての生産領域を支配していて自由競争がどこでも完全におこなわれているような社会状態，つまり純粋資本主義社会を想定しなければならないとしていることは明白であろう。マルクスのこうした指摘は，それをたんに「片言隻句」だとして片付けるわけにはいかないであろう。というのは，「原理的な到達点」としての純粋資本主義社会の想定は，重田氏による否定にもか

かわらず「『資本論』におけるマルクスの基本的方法」をなしており，また，それゆえにこそ『資本論』はたんなるイギリス資本主義分析に終ることなく資本主義の一般理論たりえているのだからである。

もっとも本書には，「自由競争が全面的に展開している『資本論』的な『純粋の資本主義社会』」(32頁)とか，「『資本の自由な競争，ある生産部面から別の生産部面への資本の移転の可能性，平均利潤の均等な高さなどが完全に成熟して存在している』ような『資本論』的——むしろ宇野『経済原論』的——な『純粋の資本主義社会』」(216頁)といった章句があちこちにあって，このような章句からすれば著者は『資本論』での純粋資本主義社会の想定を容認しているようにも考えられる。しかし，もしそうだとすれば前掲の設問自体が意味をなさなくなると思われるのだが，どうであろうか。

以上，本書の基本的主張の一端を紹介し，それにたいする私の疑問を卒直に述べたのであるが，最後に，本書には，「『純粋化傾向』の多義性」や「『商品経済』論的資本主義把握の仮象性」などについての興味深い所論が含まれていることを付言して，この小文の筆をおくことにする。

〔岡崎栄松〕

---

徳永正二郎

## 『為替と信用』

——国際決済制度の史的展開——

新評論　1976.4　318ページ

---

### I

本書は，著者，徳永正二郎氏が，きわめてエネルギッシュで入念な思考にもとづき，また綿密な歴史的検討をつうじて構築された，意欲的で雄大な「国際通貨(決済)制度」論である。著者は，何よりも理論に重きをおき，「信用と一体不可分の関係」(本書5頁)にある為替取引を主題とした国際通貨制度の体系的把握に大きい熱意を傾けている。この点は，わざわざ本書のタイトルに『為替と信用』という一般的表現を与え，歴史的検討は副題にすぎないものとなっていることから明白である。

そして著者の言葉によれば，「本書の真の意図は，現代の国際通貨(決済)制度の基本構造を明らかにし，そこに内在する矛盾が如何なる性格のものであるかを追求する材料を蒐集する」(同5頁)ことにある。しかし，ここで格別に重視すべきことは，本書のいう「国際通貨制度の基本構造」が，信用を重要な基礎とした立体的構造として把握されている点にある。すなわち「国際通貨制度は銀行信用制度の特殊な形態であり，国際決済制度はその基底に信用論ないし信用制度論をもつという認識」(同5頁)が，本書を貫く軸心としての主張となっていることにある。

とはいえ，本書の構成は，「理論的問題の整理編」である序章と，第1—第6章の歴史篇との2つに大きく分れる。このうち，圧倒的部分を占めるのが歴史篇である。すなわちシャンパーニュの大市決済にはじまり，リヨン決済市を経て，低地諸国の近代的決済制度の検討，さらにロンドンの「現代的」国際金融，決済市場におよぶ克明な歴史的分析が本書の$^{3}/_{5}$を超えている。たしかに「本書の直接の目的は，為替取引および国際決済制度が……生成し発展していく過程をいわば進化論的に叙述することにある」(同5頁)。カバーされた時期は，12世紀中葉から20世紀初期までの長期の発展を掩い，この歴史的分析の射程は，序章でとり上げたIMF体制の評価，SDR創出の意義(同20—23頁)に及び，さらに将来に向けられている。

しかし，すでに指摘したように，本書はたんなる歴史の書ではない。史的変遷の考察は，「有機的生命体の運動メカニズムの解明にあたって，もし進化論，発生学が一定の貢献をなしているとすれば，同じことは，現代の国際通貨制度の基礎的運動機構を論及しようとするばあいにもいえよう」(同5頁)という考えに立って，いわば目的論的にとり上げられている。したがって歴史的分析のスクリュプラシティはそれとして，著者の最大の関心は史的考察の過程で「受けた強い印象」すなわち「近代的国際決済制度は……信用制度の特殊な形態として，生成し開花していったという事実の生々しさ」(同5頁)を「総決算的帰結」に纒め上げ，『為替と信用』へと体系化することに力を注ぐことにある，といえるであろう。

そしてこの体系化に当っては，「国際決済市場を国民的信用貨幣制度と国際引受信用制度との融合」あるいは「癒着」(同20頁)の場所と考え，この「基礎上で」，「国民的貨幣市場相互を連結する媒介環」として「為替銀行の機能」(同20頁)をとくに重視している。この点は，「史的分析に立脚して」(同8頁)纒められた序章(第1節　問題の所在にはじまり，第4節　国際金融市場の形成と内在的矛盾に終る)において，必ずしも平明ではない諸論点を結びつける共通の導きの糸となるのが「為替銀行の機能」であることから明らかである。したがって，歴史篇においても，1. 信用と不可分な為替取引，2. 為替銀行の機能という2つの重要な糸が織り為されて，本書